

## 第4章

# エクアドルのバナナ産業と対日貿易

新木秀和

要約：

バナナは最大の貿易量をほこる果実であり、生産現場と消費者をつなぐ関係性が注目される代表的な熱帯一次産品である。アジアと日本の関係がとくに注目されるが、ラテンアメリカ地域を含む世界市場の動向を同時に踏まえていくべきであろう。たとえば2006年よりEUはラテンアメリカ産バナナに対する関税措置を開始するなど、バナナ貿易にもトピックスがある。本稿ではバナナ産業の現況を理解する基礎資料として、エクアドルを中心とするラテンアメリカ地域のバナナ産業の状況と世界の最新動向を整理し、あわせて日本でのバナナ輸入の経緯と現状を明らかにしようとする試みである。

キーワード：バナナ エクアドル 対日貿易 一次産品輸出

## はじめに

本報告は2年度目の研究に向けて、第1に世界のバナナ産業に関する統計資料の整理を行うこと、第2にラテンアメリカのバナナ生産国の中で対日貿易の実績があるエクアドルのバナナ産業および対日輸出の概略を把握し、同国を中心とするラテンアメリカのバナナ産業の諸相を分析する際の視角を定

めること、これらの2点をねらいとしている。

執筆者がバナナ産業に着目した理由は次のような点にある。すなわち、バナナが果実の中で最大の貿易量をほこる代表的な果実であること、20世紀を通じたバナナ産業の発展の経緯の中で多国籍企業の支配が議論的になってきた代表的な熱帯一次産品であり、とくに中米諸国では米国系多国籍企業(ユニテッド・フルーツ社など)による農園生産と市場をつなぐコンプレックスの支配が知られてきたこと、しかし同時に、世界最大のバナナ輸出国であるエクアドルの場合は相対的に地場資本の力が強く、企業グループによるバナナ産業の統合と支配が重要性を持つこと、などの要因による。アジアのバナナ産業への注目度が大きい日本においても、ラテンアメリカ地域の状況や動向をより積極的に把握すべきだと筆者が考える所以である。

また最近の情勢に目を向けると、国際的な市場統合の動向を受けたEU(ヨーロッパ連合)のバナナ政策の転換と、それに対するラテンアメリカ側の対応が注目される。EUは、旧植民地のACP(アフリカ・カリブ・太平洋)諸国からのバナナに無関税輸入枠を設けて優遇してきたため、ラテンアメリカのバナナ生産国はその措置に反発を強め、1990年代を通じて両者間で「バナナ戦争」と呼ばれる貿易問題が続いてきた(Josling and Taylor eds.[2003]、Striffler and Moberg eds.[2003])。ラテンアメリカ諸国側による提訴でWTO(世界貿易機関)は1997年にEU敗訴の裁定を下した。これを受けてEUは2006年以降、ラテンアメリカからのバナナ輸入に対する全面関税化の導入に踏み切った。関税を1トン当たり75ユーロから230ユーロへと引き上げたのである。このため両者の対立が再燃し、ラテンアメリカ側は再びWTOに仲裁を申し立てている。

また日本市場の側から見ると、バナナ輸入についてはアジア、とくにフィリピンからの開発輸入や、それに対抗するフェアトレードの実施などに関心が集中し、実態調査や研究が行われてきた。一方、エクアドルなどラテンアメリカ諸国からの輸入を含めた世界的なバナナ産業の動向については、調査研究や資料データの整理が十分になされているとはいえない。

こうした状況を踏まえ、バナナ産業に関する発展の経緯と特徴、新しい動向などを資料データに基づいて提示することが本稿の目的である。

## 1 . バナナ産業の現状

バナナは発展途上経済における代表的な熱帯産品であり、世界経済において重要な位置を確立したのは 20 世紀以降である。その生産・流通・消費の過程で農場生産における労働問題や世界市場での多国籍企業の支配が如実に観察されることから、開発論などの実証研究やフェアトレードなど社会運動の対象となってきた。そうした特徴に応じ、バナナ産業の研究は現代世界の社会経済発展における低開発の問題や、南北問題ないし南南問題として取り上げられる傾向が強い。熱帯産品の中で砂糖やコーヒーが歴史研究の対象となるのに対し、バナナはむしろ国際関係や経済学の分野で現代世界の諸問題につながるテーマとして議論の対象となる。そしてバナナ産業の研究は、多国籍企業の支配を問う研究が中米諸国などを対象になされてきた。冷戦崩壊後の 1990 年代以降は、従来の企業研究や労働-資本関係の研究にジェンダーやエスニシティの要素が加味され、バナナ産業の労働現場における労働者の生活状況にも目が向けられるようになっている(新木[2002]、Bourgois[1989])。

地球上でバナナの生産地帯は南緯 30 度から北緯 30 度にかけての熱帯および亜熱帯地域が中心であり、そこはバナナベルトとも呼ばれる。生育条件としては、高温と年間を通じた一定の雨量が必要であり、最適温度は 29.4 度、最低必要な年平均雨量は 1270mm とされる。芭蕉科に属するバナナは木ではなく一種の草であって、茎(仮茎)が強風に弱く、ハリケーンや台風の被害を受けやすい(この点で、中米・カリブやフィリピンにくらべ、強風のないエクアドルの風土は有利である)。またバナナにはパナマ病(カビが原因の立ち枯れ病)およびシガトカ病(黒斑点病)という 2 種類の病害があり、現在では対策も取られているが、後述するように 20 世紀を通じてこれらの病害が各地のバナナ生産に打撃を与え、国際動向に影響を及ぼす事態が起こってい

る。このため、シガトカ病対策で薬剤散布が行われたり、品種改良としてキャベンディッシュ種の導入を促進するなどの対策が進められてきたのである。ではまず、近年における世界のバナナ産業の動向を把握しよう。

## 世界のバナナ生産

表1は2000年から2003年にかけての世界のバナナ生産量を地域別に示したものである。アジアが全体の半分近くを占め、それに次ぐ南米がアジアのさらに半分以下であることがわかる。国別データについて後述するように、これはインドや中国、タイなどの諸国の比重がかなり大きく、しかもそれらの国々のバナナが輸出よりも国内消費に多く回っていることにも関係する。なお、統計では北中米および南米という地理的分類に基づいて地域区分がなされており、ラテンアメリカやラテンアメリカ・カリブという地域を設定するには個別の国々の統計を照合しなければならない。

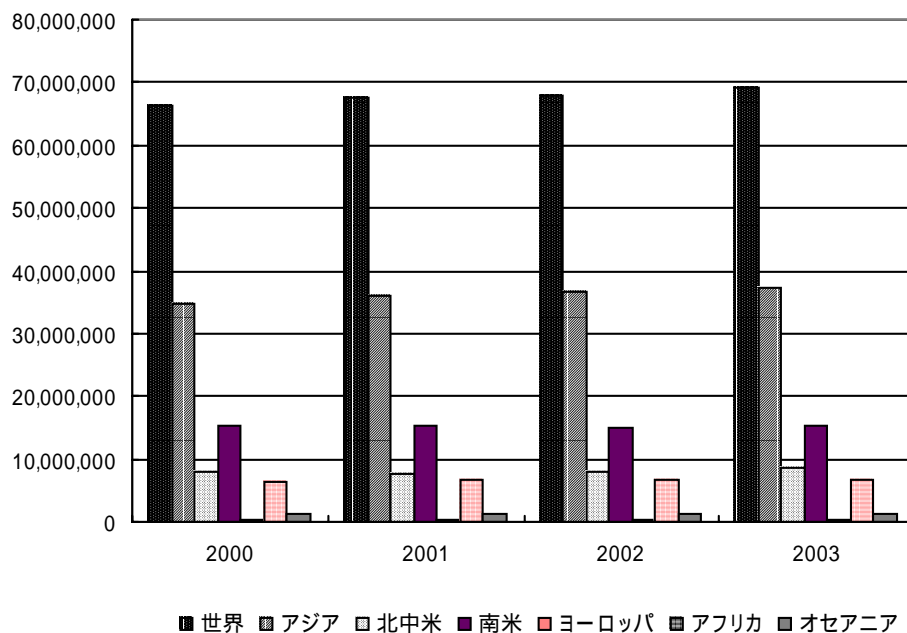
実際には、バナナを生産量を正確にはかることは難しい。脆弱で傷みやすく、果実の日持ち制限も厳しいというバナナの性質から、農園で収穫され出荷される過程で廃棄される割合が比較的高く、また生食用ではない料理用のバナナも生産量の半分近くを占めるからである。バナナ生産国の多くでは、イモのように固いこの料理用のバナナが、蒸したり焼いたり揚げたりして食べられる。主食になっている場所もある（若槻[1976]、中村[1991]）。

同様に、表2では世界の主要なバナナ生産国についてまとめ、それぞれのバナナ生産量を示した。インドが世界最大の生産量をほこり、第2位のブラジルの約2.5倍に達し、輸出でも最大のエクアドルの約3倍になる（表4）。中国（第3位）、フィリピン（第5位）、インドネシア（第6位）、タイ（第9位）、アラブ首長国連合などのアジア諸国が、ブラジル、エクアドル、メキシコ、コスタリカ、コロンビア、グアテマラなどのラテンアメリカ諸国にまさるほどのバナナを生産していることがわかる。このことは、主要輸出国と結びつけられがちなバナナに関する一般のイメージとは異なり、大規模生産国では国内消費に回されるバナナの比重がかなり高いことを示している。

表1と表3（後述）をくらべると、世界全体で生産されるバナナが3年間で6600万トン台から6900万トン台へと増大してきたのに対し、輸出向けのバナナは1400万トン台から1500万トン台へとこれも増加したものの、輸出量は生産量の4分の1から5分の1程度にとどまることがわかる。

表1 世界の地域別バナナ生産量 (トン)

	2000	2001	2002	2003
世界	66,222,580	67,528,885	67,993,614	69,286,046
アジア	34,719,297	36,100,284	36,798,054	37,143,237
北中米	8,002,754	7,708,618	7,928,975	8,529,008
南米	15,427,039	15,356,253	14,855,436	15,151,720
ヨーロッパ	431,373	456,331	446,600	439,600
アフリカ	6,523,585	6,773,196	6,800,429	6,848,086
オセアニア	1,118,532	1,134,203	1,164,120	1,174,395



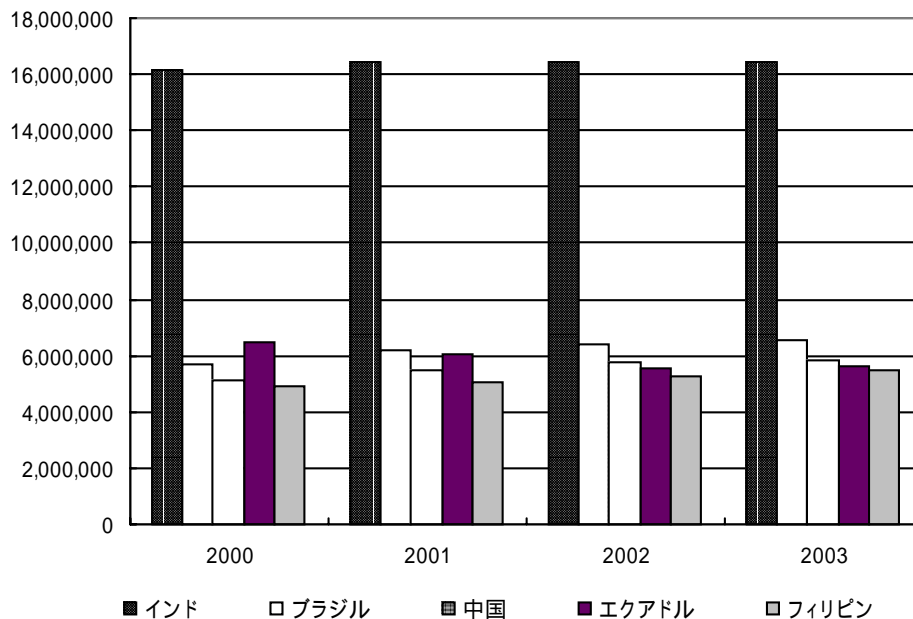
(出所) FAOSTAT

表2 世界の国別バナナ生産量

(トン)

	2000	2001	2002	2003
インド	16,170,000	16,450,000	16,450,000	16,450,000
ブラジル	5,663,360	6,176,960	6,422,860	6,518,250
中国	5,139,909	5,477,074	5,783,818	5,826,521
エクアドル	6,477,039	6,077,040	5,528,100	5,609,460
フィリピン	4,929,570	5,060,782	5,264,470	5,500,000
インドネシア	3,746,962	4,300,422	4,384,384	4,311,959
メキシコ	1,863,252	2,027,997	1,885,803	2,026,613
コスタリカ	2,250,000	1,739,280	1,611,963	1,862,978
タイ	1,750,000	1,750,000	1,800,000	1,800,000
ブルンジ	1,513,997	1,548,897	1,602,979	1,600,000
コロンビア	1,523,980	1,375,320	1,424,314	1,450,000
アラブ首長国連邦	1,124,800	1,125,500	1,097,000	1,221,300
グアテマラ	841,000	898,000	1,000,000	1,000,000

上位5カ国のバナナ生産量の推移



(出所)FAOSTAT.

## 世界のバナナ貿易

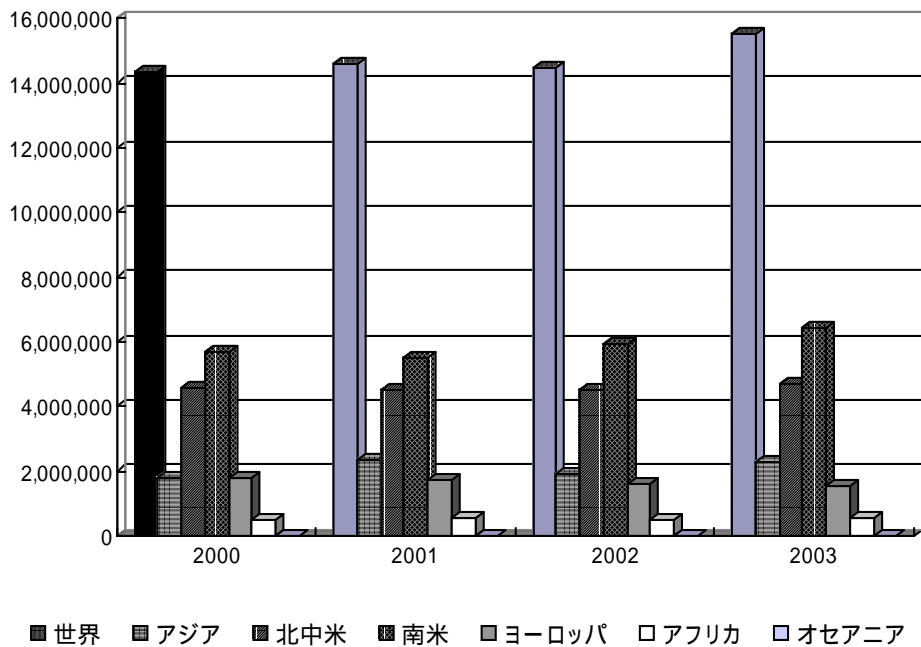
続いて、バナナの輸出入と消費の動向を示して、世界におけるバナナ貿易の現状を明らかにしよう。

表3に地域別のバナナ輸出動向を示した。これを見ると、先の生産動向とは反対に、アジアではなくラテンアメリカ（南米および一部の北中米）の比重が大きいことが一目瞭然である。このことは表4からより明確にわかる。世界的なバナナ輸出国としてエクアドル、コスタリカ、フィリピン、コロンビアの4カ国が上位を占めており、2000年から2004年にかけては、第2位から第4位までの順位にいくらか変動はあるものの、エクアドルの優位は揺るぎない。2004年の実績で、世界の輸出量の3分の1ほどがエクアドルの輸出量に相当する。その他にもグアテマラ、ホンジュラス、パナマ、ブラジルなどのラテンアメリカ諸国が主要な輸出国に含まれる。このうち世界第2位の生産量をほこるブラジルの場合は、生産量の30分の1ほどしか輸出しておらず、広大な国土の中でバナナを生産から消費への流れが存在し、ほとんど国内消費されることがうかがわれる。

世界のバナナ輸入動向と輸入国の状況を示したのが表5と表6である。いうまでもないが、＜南＞の熱帯地域で生産されるバナナは貿易によって＜北＞の消費国に運ばれて消費される。この意味で典型的な南北間貿易が成立している。地域別で上位にあるヨーロッパと北中米（とくに米国とカナダ）についての詳細が国別のデータから読みとれる。世界の4分の1から3分の1の輸入量を占める米国に次いで、ドイツ、日本が続く。表6を見ると、世界の先進国やロシア、中国などの大国（大消費国）が含まれるのは当然として、その他では、ラテンアメリカからアルゼンチンとチリがリストに出てくるのが目につく。両国が近隣ないし域内の生産国からバナナを輸入していることがうかがわれる。

表3 世界の地域別バナナ輸出量 (トン)

	2000	2001	2002	2003
世界	14,343,089	14,595,053	14,481,083	15,504,931
アジア	1,767,527	2,315,809	1,908,111	2,285,488
北中米	4,581,283	4,521,150	4,516,507	4,704,161
南米	5,710,343	5,504,239	5,933,353	6,397,632
ヨーロッパ	1,773,103	1,735,258	1,614,347	1,555,395
アフリカ	510,585	518,518	507,948	562,016
オセアニア	249	79	282	239



(出所)FOASTAT

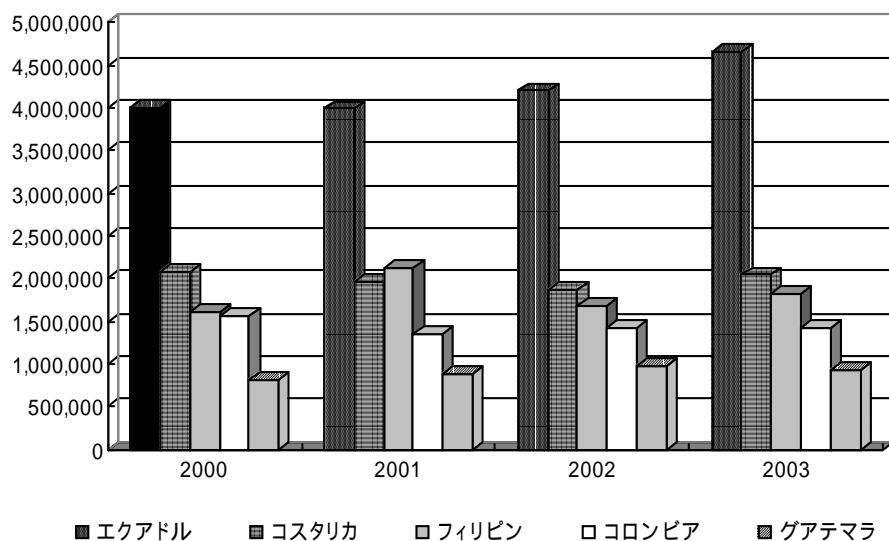


表4 世界の国別バナナ輸出量

(トン)

	2000	2001	2002	2003
エクアドル	3,993,968	3,990,427	4,199,156	4,664,814
コスタリカ	2,079,280	1,959,272	1,873,350	2,042,489
フィリピン	1,599,920	2,129,309	1,684,986	1,828,220
コロンビア	1,564,400	1,344,231	1,424,352	1,424,819
グアテマラ	801,515	873,829	980,557	936,114
ベルギー	966,640	971,494	889,431	862,959
ホンジュラス	374,964	431,830	441,407	507,634
米国	400,188	406,968	416,600	427,543
パナマ	489,284	426,081	403,923	385,320
カメルーン	238,170	254,102	238,412	313,723
コートジボワール	243,032	255,582	256,000	242,446
ブラジル	72,468	105,112	241,038	220,771
アラブ首長国連邦	30,000	47,000	7,700	191,292
ドイツ	105,309	142,479	184,613	176,122
フランス	241,679	198,975	192,778	165,548
イタリア	179,542	146,927	133,335	125,065

上位5カ国のバナナ輸出量

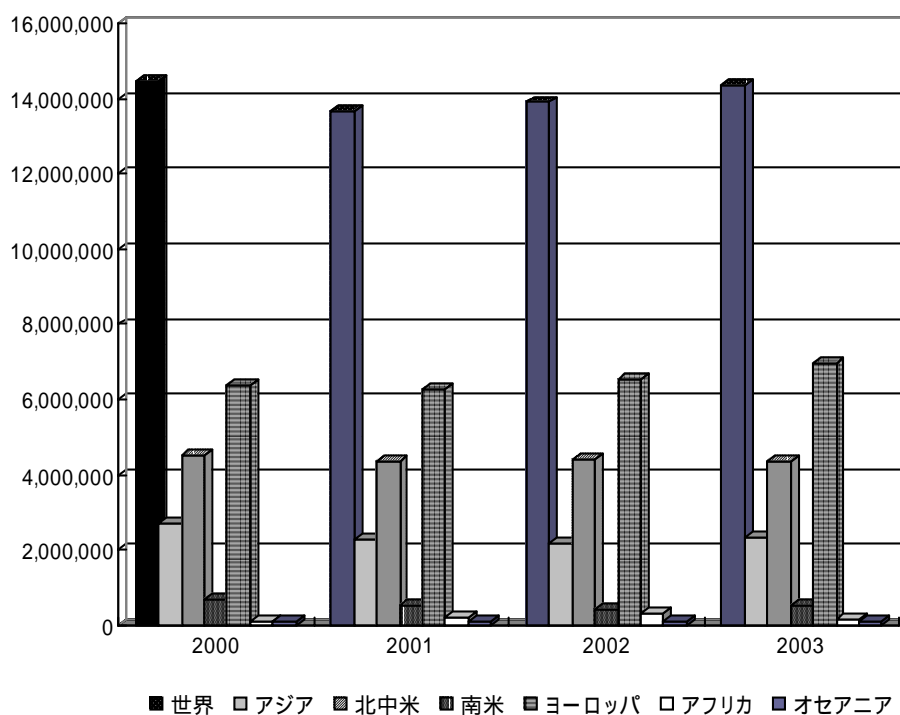


(出所) FAOSTAT

表5 世界の地域別バナナ輸入量

(トン)

	2000	2001	2002	2003
世界	14,452,666	13,656,968	13,913,423	14,365,408
アジア	2,715,809	2,266,323	2,176,970	2,338,386
北中米	4,502,783	4,329,934	4,405,474	4,366,608
南米	693,375	521,631	433,919	494,791
ヨーロッパ	6,385,473	6,285,469	6,530,687	6,958,937
アフリカ	80,620	183,727	297,949	138,784
オセアニア	74,604	73,213	68,424	67,902

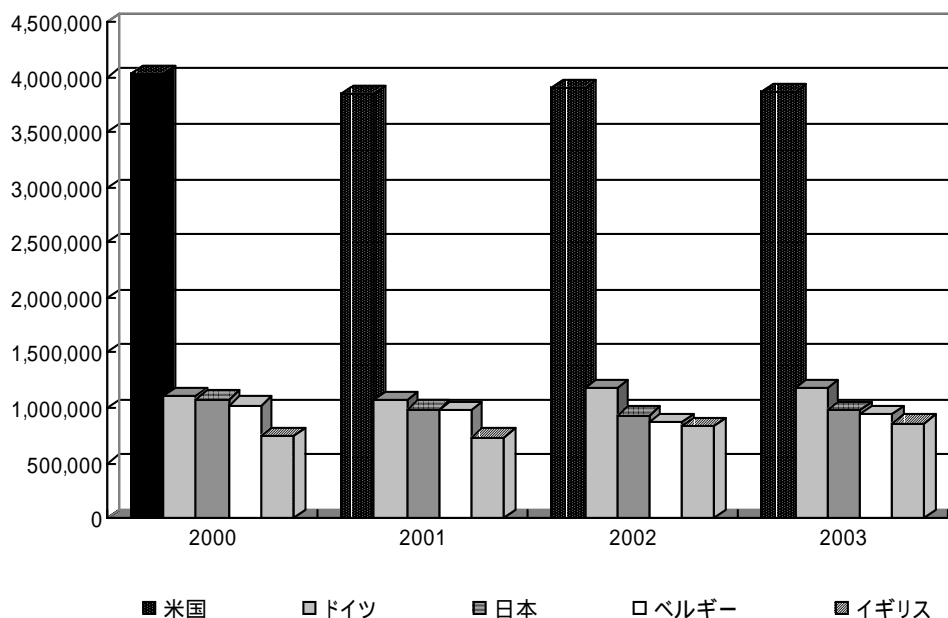


(出所) FAOSTAT

表6 世界の国別バナナ輸入量 (単位:トン)

	2000	2001	2002	2003
米国	4,030,636	3,840,605	3,906,959	3,870,510
ドイツ	1,114,505	1,064,946	1,182,772	1,180,337
日本	1,078,655	990,553	936,272	986,643
ベルギー	1,027,273	982,081	876,088	946,077
イギリス	742,993	736,491	833,154	863,489
ロシア	502,952	612,211	649,959	802,073
イタリア	604,774	569,771	597,349	596,810
カナダ	398,616	405,460	417,064	423,128
中国	593,533	413,965	347,807	421,246
フランス	340,676	366,272	348,498	339,228
アルゼンチン	339,963	330,072	229,546	286,396
イラン	200,000	75,586	150,725	271,539
ポーランド	285,129	270,248	240,177	260,150
スウェーデン	186,500	182,248	205,460	226,238
韓国	184,212	194,552	187,169	220,965
チリ	192,527	121,104	149,093	158,876

上位5カ国のバナナ輸入量



(出所) FAOSTAT

## 2 . 日本のバナナ輸入

次に、日本におけるバナナ輸入の経緯と現状、主な輸入先と担い手について整理していこう。

### 日本のバナナ輸入の経緯と現状

日本に初めてバナナが入ったのは明治時代とも1930年代ともいわれるが、1930年代の台湾産だったという見方が強い。その後は1963年にバナナの輸入が自由化されるまで、日本でバナナといえば、台湾バナナが圧倒的な位置を占めていた。病気の時にしか口にできないような貴重で高価な存在というバナナのイメージがあった。しかし輸入自由化でバナナの輸入量が急増し、なかでも、台湾産を押しつけてエクアドル産が日本になだれ込んできた。そして、バナナはたちまち身近な食べ物に変わった。1972年にエクアドル産バナナは日本市場で43%のシェアを占めていた(田邊[2006])。

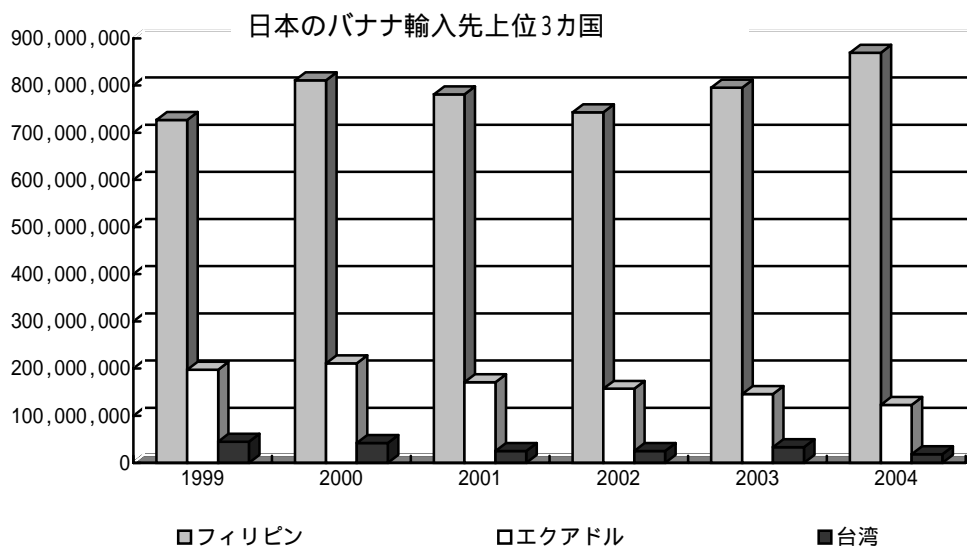
しかし、1960年代末頃から米国の多国籍企業がフィリピンのミンダナオ島で、日本市場向けのバナナ栽培を開始し、やがてフィリピン産バナナが大量に到来する。病害に強いキャベンディッシュ種を導入したこともその要因である。こうした開発輸入によって「フィリピン農園と日本の食卓」が近づけられた経緯は、1980年代になって『バナナと日本人』の出版(鶴見[1982], [1988])などを通じて知られるようになった。他方で、エクアドルバナナは1980年代には一時的に日本市場から姿を消したが、1985年になり日本向けのバナナにキャベンディッシュ種が採用されたことで輸入が再開し、現在ではエクアドル産バナナも日本で馴染みの存在になっている。

フィリピンから日本へのバナナの流れが現在もなお日本市場の主流となっていることは、表7から明らかである。2003年における日本のバナナ輸入実績(箱数)は約7580箱(1箱=12~13キロ)で、その約80%をフィリピン産が占め、エクアドル産は約15%だった。15ほどの輸入業者がフィリピン産を扱うのに対し、後述するようにエクアドル産はパシフィック・フルーツ・

リミテッド 1 社のみでほぼすべての輸入をまかなっていた。

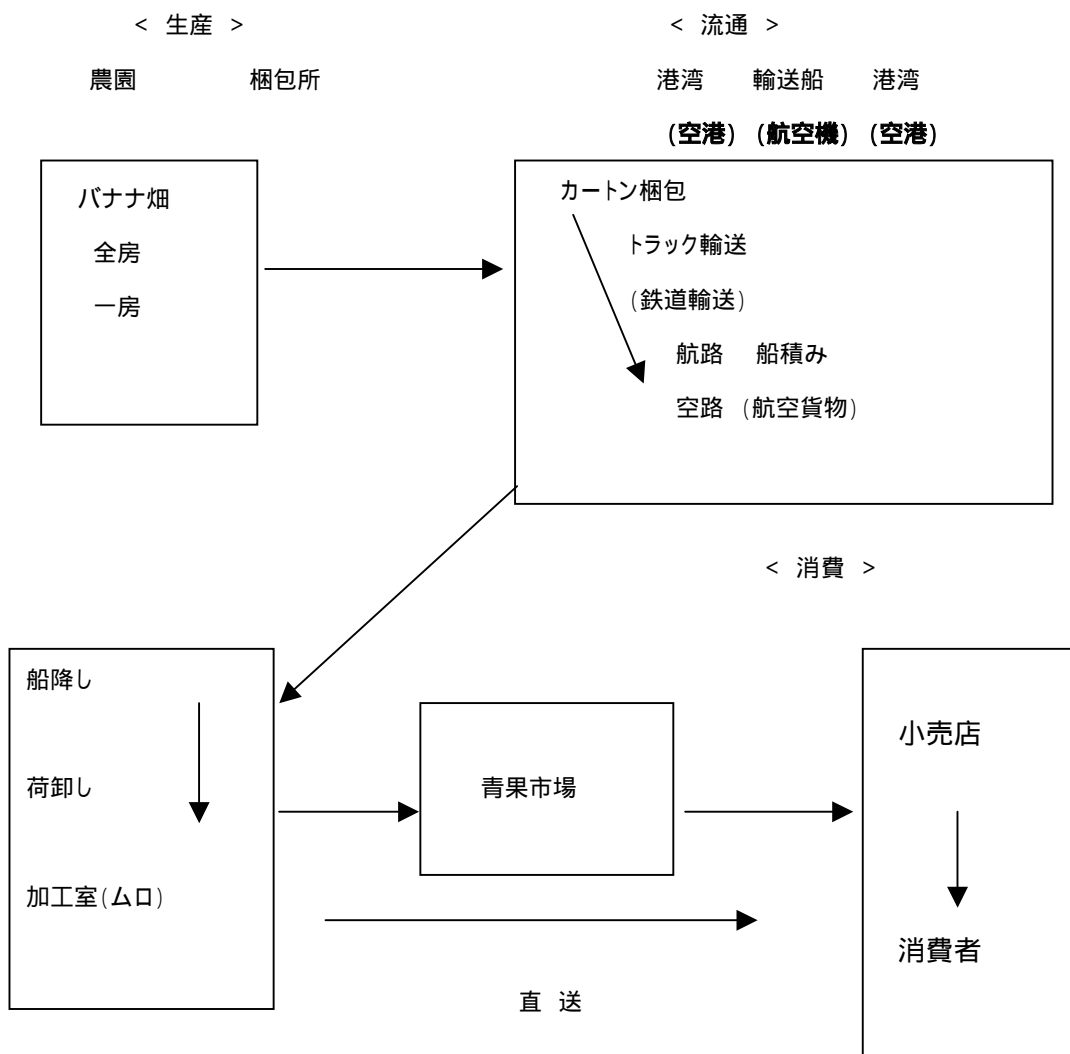
表7 日本の主要バナナ輸入先 (トン)

	1999	2000	2001	2002	2003	2004
フィリピン	727,071,232	810,999,502	781,413,139	743,548,845	795,560,800	869,641,247
エクアドル	197,185,635	210,819,951	170,643,169	157,012,971	145,578,433	122,717,801
台湾	44,655,180	42,273,648	25,177,680	25,073,688	33,518,436	18,226,476
中国	8,939,121	3,427,872	5,740,177	3,813,694	2,735,952	3,608,563
メキシコ	1,721,768	1,393,636	2,044,395	2,561,878	3,057,303	3,302,817
ペルー					91,624	3,216,298
タイ	900,375	1,331,625	1,513,365	1,252,283	1,793,289	2,201,599
コロンビア		438,827	165,867	1,483,407	2,194,133	1,925,522
ドミニカ	1,674,910	1,986,096	1,408,692	1,260,840	2,093,342	1,170,645
インドネシア			235,994			
マレーシア	6,264					
オーストラリア	11,520					
米国		3,587,819	2,211,031	63,151	1,632	
ハワイ	1,038,069					
スリランカ			1,245			
合計	983,204,074	1,078,654,931	990,553,509	936,272,002	986,643,144	1,026,010,968



(出所) 日本バナナ輸入組合

図1 バナナの生産・流通経路



日本市場までの日数    フィリピン産バナナ.....3.5~5 日間  
 台湾産バナナ.....3~5.5 日間  
 エクアドル産バナナ.....17~20 日間

(出所) 各種資料より筆者作成。

## エクアドル産バナナの輸入

生産地から日本へのバナナの流通経路を図式化したのが図1である。ここでは、エクアドル産バナナを例に行程をたどってみる。

農園で収穫されたバナナは全房のまま労働者が肩にかついで切り取られ、それらは運搬用ケーブルや人力でトラックまで運ばれ、消毒と梱包作業に移るが、海外向けの輸出用バナナは仕向先用のカートンに入れられる。日本向けの場合は、日本語で書かれたカートンがすでに用意されている。中米などでは港までの輸送用に鉄道が敷かれることが多かったが、エクアドルの場合はトラックで農園から港まで運ばれる。大手の輸出企業では専用のバナナ運搬船やそれを接岸するための専用ドックも港湾の一角に設置されている。エクアドルの主要な輸出港としては、グアヤキル港の他、南部のポリバル港、北部のエスメラルダス港、中部のマンタ港がある。

エクアドルから日本に向けて定期的に（毎週1船）バナナが出荷されている。太平洋を越えてバナナを輸送するにはバナナ専用船で約3週間かかる。日本向けバナナはC・A（Control Atmosphere）船という大気調整システムを完備した運搬船で運ばれる。船内の酸素を抜いて窒素を入れ、バナナを酸化させないように仮眠状態にし、鮮度を保ったまま運ぶ。バナナは青いまま輸入され、日本の加工業者によって加工室（ムロ）で追熟され黄色にしたうえで、市場や小売りに出される（田邊[2006]）。

太平洋横断というコストがかさむため、エクアドル産バナナにとって日本市場への参加は条件がよくないが、にもかかわらず日本市場にエクアドル産バナナが定着できたのは次の理由による。第1に、エクアドル産バナナは糖度が大きくて甘い。海岸部などのバナナ生産地帯ではフンボルト寒流が昼夜の大きな温度差という好条件を生み出し、甘いバナナを育てるためだという。第2に日持ちや店頭での棚持ちがよい。第3に、バナナに病気が出る頻度が他国に比べて小さいという利点もある。それから、他の産地のものよりも果実自体が大柄で、同じキャベンディッシュ種でもフィリピン産よりもひと回り大ぶりだという特徴もそなえている（田邊[2006]）。

表8 日本バナナ輸入組合の概要

設立	1965年(昭和40年)6月 [同年9月認可取得]
代表者	理事長: 清水信次 専務理事: 山崎金一
事業内容	バナナの輸入調査統計に関する活動 バナナの安全性に知識普及に関する活動 バナナ普及に関する広報活動

組合員企業	概要
株式会社ドール	フィリピンのミンダナオ島で日本市場向けバナナを栽培し、対日貿易を担う。世界各地でフルーツや野菜の生産と流通に従事。
フレッシュ・デルモンテ・ジャパン株式会社	
株式会社チキータ ユニフルーティー ジャパン	フィリピンのミンダナオ島で日本市場向けバナナを栽培し、対日貿易を担う。世界各地でフルーツや野菜の生産と流通に従事。
住商フルーツ株式会社	1970年12月設立。フィリピンのミンダナオ島でバナナを栽培し、グレイシオというブランド名で対日輸入。開発輸入の代表例。米国などで他のフルーツも栽培し流通に従事。
富士フルーツ株式会社	
株式会社ローヤル	1964年1月設立。フィリピンのミンダナオ島でバナナを栽培し、みやび、エストレージャなどのブランド名で対日輸入。
全日空商事株式会社	2001年からフィリピンのミンダナオ島で契約栽培したブランドバナナ frescana の輸入開始。2005年からはエクアドル産バナナの輸入にも従事。
株式会社パシフィック・フルーツ・リミテッド	エクアドル産バナナの輸入大手。

[その他の企業] 伊藤忠商事株式会社、大阪中央青果株式会社、海外物産貿易株式会社、兼松食品株式会社、シーオン株式会社、有限会社ジャパン通商、株式会社ジャパンプロデュース、神戸青果株式会社、新東亜交易株式会社、東京荏原青果株式会社、東京青果貿易株式会社、東京多摩青果株式会社、藤井治商事株式会社、横浜丸中株式会社、株式会社ライフコーポレーション

(注)2006年2月時点のデータ。

(出所)日本バナナ輸入組合ホームページ、同組合員企業各ホームページより作成。



## 主なバナナ輸入企業・団体

日本におけるバナナ輸入の動向を担い手である輸入企業を軸に見ておこう。表 8 に示すように、1963 年のバナナ輸入自由化を受けて、1965 年 6 月には日本バナナ輸入組合 (The Japan Banana Importers Association) が結成された。同組合のホームページ情報によれば、2006 年 2 月現在、同組合には 23 社が参加している。

すでに述べたように、フィリピンのミンダナオ島からのバナナ輸入に従事する企業が主流を占めるが、基本的にいって、ドール(キャスル&クック)、デルモンテ、チキータ(ユナイテッド・ブランズ)のように米国系多国籍企業の関連会社と住友系の企業がそうした開発輸入に着手し、経営を多角化させるなどしながら現在に至る。組合の中核を形成する企業もそこに重なる。それに加え、青果取扱や食品関連などの企業も組合に参入し、各自の強みを活かしながら事業を展開している。

周知のように、このフィリピン産バナナについては、米国系多国籍企業や日本の商社による市場独占(過剰供給や低価格競争など)や現地労働者の管理などの状況に対する批判が寄せられ、その中から生産者と消費者の関係を問い直す動きが生まれてきた。消費者運動や社会運動にも大きな影響を与えてきたことが知られている。1980 年代後半から日本ネグロス島キャンペーンやオルター・トレード・ジャパン社の活動が始まり、1989 年からはフェアトレードによるバナナ取引が開始された(池住・中村・杉本[1988]、株式会社オルター・トレード・ジャパン編 [2005]、中村[2005])。

他方、エクアドル産バナナの輸入を担ったのは、現地企業グループのノボア・グループの子会社である株式会社パシフィック・フルーツ・リミテッドだった。1974 年 2 月設立の同社は、ルイス・ノボア(ノボア・グループ創業者)と知遇を得て事業に着手した伊藤元章氏のもとで、現在までの 30 年間にわたりバナナ輸入に従事してきた。同社のホームページを見ると、エクアドルの自社農園では循環型農法(有機肥料を使い自然の循環作用を利用して土壌に無理をさせない農法)による有機栽培が行なわれ、その関連で農園が野

鳥の住処になっていることが宣伝されている。エナーノとサニートが同社のブランド名だが、その他にも味と風味に配慮したオリート（モンキーバナナ）やモラード（果皮が紅紫色のバナナ）、そして料理用バナナも扱う。

2005年には、日本人移住者である田邊正裕氏らの共同経営によるテクノバナ社が自社農園で栽培されたバナナを日本に出荷するようになった。このバナナも循環型農法による有機栽培であり、バードウォッチングができることが自慢という。全日空商事が日本市場での販売を請け負っている。

また表7を見るように、エクアドル産ほどの数量ではないが、同国以外のラテンアメリカ諸国、メキシコ、ペルー、コロンビア、ドミニカ（注：ドミニカ共和国のことであろう）からもバナナ輸入の実績がある。詳細については今後の検討事項だが、国際市況の動向や二国間関係の状況にも応じて、そうしたバナナ貿易においても注目すべき状況があるかもしれない。

実際、2003年以降はメキシコ産に迫るほどの量でペルーからのバナナ輸入が記録されている。同年と2004年の2年分しかまだデータがなく即断はできないが、恐らくこれは、有機栽培をうたうペルー産のインカバナナの輸入であろうと思われる。インターネット情報によると、このインカバナナや、エクアドル産や台湾産のバナナを扱う企業として、カリフォルニアとチリに支店を置くフルーツツリー社の情報が見られるからである。

### 3．ラテンアメリカおよびエクアドルのバナナ産業

#### バナナ産業の発展

対日関係からエクアドルを含むラテンアメリカ地域の全般状況に目を転じると、この地域におけるバナナ産業はどのような位置や特徴を持ってきたといえるであろうか。

20世紀におけるバナナ産業の成立と発展は、ラテンアメリカ諸国において対米関係の再編を意味し、それは米国系多国籍企業による市場や流通面ばかりか土地や労働面にもおよぶ支配的影響力の行使という形をとった。中米諸

国において「バナナ帝国」と呼ばれたユナイテッド・フルーツ社による進出と支配が典型である (Bucheli [2005]、Striffler [2002]、Striffler and Moberg eds. [2003])。1954 年のグアテマラ革命に見るように、土地をめぐる問題も激化し、1960～70 年代にかけて農地改革の問題につながった。

次に検討するエクアドルの行動とは対照的に、コスタリカやパナマのような中米のバナナ生産諸国を中心として、バナナ輸出国連合 (UPEB) が結成され加盟国間の協力関係が構築されたのは、石油部門における石油輸出国機構 (OPEC) と同様に、資源ナショナリズムの高揚と多国籍企業への対抗という意味合いが濃かった。

### エクアドルのバナナ産業

今日、世界最大のバナナ輸出国になっているエクアドルについて、中米諸国などとの対比という視点も交え、バナナ産業の特徴や課題を探っていく。

エクアドルのバナナ輸出は 1910 年頃に始まったといわれるが、本格化は第二次世界大戦を経た 1948 年以降であり、空前のバナナ輸出ブームをもたらした。1954 年には世界最大のバナナ輸出量を記録する。その背景には、1934 年にユナイテッド・フルーツ社がエクアドルに進出してテングル農園を購入し、直接経営によるバナナ生産を開始したこともあった。

1940～50 年代当時、エクアドルを含むラテンアメリカ産バナナの主流は、グロスミッチェル種だった。50 キロ程度の大きな房をそのまま全房ごと船に積み込んで輸出していた。しかし、1950 年代末から 1960 年代、とくに 1960 年代半ば中米諸国を中心にパナマ病が蔓延してバナナ生産が大打撃を受ける。

また当時の政治的不安定状況や労働運動の激化で、1950 年代末には、テングル農園の占拠闘争がユナイテッド・フルーツ社の経営続行に痛手を与えた。そして 1962 年の農園侵入事件 (労働者がテングル農園の中核部に侵入することでエンクレーブを解体させた事件) によって、同社はエクアドルからの撤退を余儀なくさせられた (Striffler [2002])。

その後、パナマ病に抵抗力のある品種が改良され生産性も数段高いキャベ

ンディッシュ種が導入されると、しだいにグロスミッチェル種にとって代わっていった。キャベンディッシュ種はシガトカ病にも強かった。エクアドルでは中米ほど病害による被害は受けなかったものの、生産性で劣るグロスミッチェル種ではもはや他国に対抗できないため、遅まきながら転換をはかったのである。1980年までにグロスミッチェル種は輸出用バナナとしては完全に姿を消すようになる。

1970年代半ばには時を同じくして、間接的統治となる契約栽培方式（contract farming）がバナナ農園の経営に取り入れられた。この制度のもとでユナイテッド・フルーツ社などの多国籍企業は、生産過程のコントロールから手を引き、直接生産に伴うすべてのリスクを地元の農園主に負わせるようになった(Striffler [2002])。

しかも、キャベンディッシュ種への移行は、農業技術面でも一層高度な水準を要求したため、バナナ農家はかえって近代化（バナナ栽培の工業化）を求められるようになった。つまり、灌漑設備の導入、農園内に張りめぐらすバナナ運搬用ケーブルの敷設、洗浄用プールやパッキングハウスの建設などが不可欠となった。また、バナナを小分けにして洗浄し、カートンに梱包するという現在の出荷方法が始まり、農家是对応を余儀なくされたのである(田邊[2006])。

土地や労働をめぐる問題は継続してきた。ユナイテッド・フルーツ社によるテングル農園からの撤退はエクアドルにおいて農地改革が開始される大きな契機となった。軍事政権のもとではあったが、1960年代後半から70年代にかけて土地問題や農業問題への関与を通じて国家が、テングル周辺のバナナ生産地帯の問題に関わるようになる。そして民政移管後の1980年代以降は農地改革から農業振興への方針転換もあり、エクアドル政府は、地場生産者に対する輸出政策および資金援助政策を通じて契約栽培制度の維持に努めてきたばかりか、その制度のもとで国家は、労働者が組織化せず孤立したままで労働再生産を行うように、農園主などの資本家層をも支援してきたのである(Striffler [2002])。

20世紀半ば以降に世界最大のバナナ輸出国となったエクアドルだが、北米市場での競争相手であるコスタリカやコロンビアにくらべると、エクアドルではヘクタールあたりの収量が少ないだけでなく、輸出の単価も安いという特徴をもつ。これは次のような要因による。

1つは生産コストが低いことである。1990年代の後半には通貨スクレが大幅に切り下がり、ドル換算で人件費が大幅に減少した。また、気候条件の違いでシガトカ病が中米ほど広がりにくく、この病気を抑えるための農薬散布の頻度が少なくすむ。

2つ目は中米諸国にくらべて中小規模(数ヘクタールから20ヘクタール程度)の生産者が多く、収量増大を目指した技術導入が進んでいないことである。さらに1980年代末には必ずしもバナナに適していない土地にも生産が急増した。

そして3つ目は、北米市場への輸送コストが中米諸国よりも高いほか、ドール、チキータ、デルモンテなどの米国系多国籍企業が中米の自社農園からのバナナの販売を優先し、供給が過剰な場合にはエクアドルで買い付けるバナナの価格を引き下げるといった措置を取るからである(清水[2002])。

### **バナナ輸出企業の特徴**

ここで担い手である輸出企業について述べれば、エクアドルの場合、中米諸国にくらべ、スタンダード・フルーツ社(ドール)やユナイテッド・ブランド社(チキータ、旧ユナイテッド・フルーツ社)のような米系多国籍企業だけでなく、むしろ地元の民族系企業、とくにグアヤキルのノボア・バナナ輸出株式会社と中国系のレイバンパック社などが輸出ブームを牽引してきたという状況がある。現在もなお、中米諸国などよりも外資による直接経営の比重が小さく、地場資本との提携関係を軸にバナナの栽培と輸出が行われる。この点もエクアドルのバナナ産業の大きな特徴となっている(新木[1997])。

表9 エクアドルのバナナ輸出企業(その他の農業輸出企業を含む) (2003年)

順位	企業名	売上高 (100万ドル)
1	Exportadora Bananera Noboa	221
2	Unión de Bananeros Ecuatorianos S.A. (Ubesa)	210
3	Kimtech	111
4	Reybanpac	99
5	Fertisa	59
6	Corporación Internacional Palacios (Cipal)	56
7	Banafresh	35
8	Fertilizantes del Pacífico	28
9	S.W.T.Trader	26
10	Tabacalera Andina (Tanasa)	25
11	Exportadora Machala	24
12	JFC Ecuador	24
13	Pretty Liza Fruit	23
14	Probanaexpor	22
15	Delcorp	22
16	Agroindustrias Dajahu	21
17	Provefrut	21
18	Bandecua	21
19	Derty	21
20	Basesurcorp	19
21	Palmeras de los Andes	19
22	Inaexpo	17
23	Israriago	17
24	Exbanecua	17
25	Triairi	16
上位 25 社の総計		1,174
バナナ部門 (計 39 社) の総計		1,367

(注)表題をバナナ部門その他の企業としたが、これらは農業部門の企業とい  
べきである。実際にバナナの生産と商品化に従事するのは、このうち 15 社  
だが、バナナ部門のみの資料を入手できなかったための措置である。

(出所) VISTAZO, "500 mayores empresas del Ecuador"

(原資料は Superintendencia de Compañías, República del Ecuador)

表 9 ではエクアドルにおける農業部門の企業をリストアップした。25 社の  
うち 15 社はバナナの生産と商品化(流通や貿易)に従事するが、資料の制約  
ですべてのバナナ輸出企業を特定できなかった。ただ、大手企業に関する現

状はそこからも十分把握できよう。

エクアドルのバナナ産業では、地元の民族系資本の比重が相対的に大きい  
が、しかし実際にはユナイテッド・フルーツ社の撤退後も、直接統治から契  
約栽培方式への移行を通じて多国籍企業の間接的影響力が維持されてきた点  
を見のがすべきではない。

## まとめ・論点整理と今後の課題

以上、概略的なスケッチとなったが、本稿において検討したバナナ産業  
の現状を整理し、いくつかの論点を指摘することでまとめに代えたい。

1．バナナ貿易は「南から北へ」という経路に沿った代表的な産品である。  
生産量と輸出量の間における大きなギャップは、発展途上国が大半を占める  
バナナ生産国の内部における「南から南へ」の流れを浮かび上がらせるが、  
他方で「南から北へ」の流れについては、多国籍企業の国際展開における「企  
業内取引」を考慮すれば、地域間や二国間の輸出入という形では必ずしもな  
いことが明らかとなる。多国籍企業の資本取引や利潤移転に関するデータ  
は入手が難しいが、それでも産業の担い手に着目することで浮かび上がって  
くる事実があるだろう。

2．バナナ産業に関する研究状況についてふれたい。日本のバナナ研究やア  
グロインダストリー研究には、アジアやラテンアメリカなどの別々の地域を  
横断するような本格的な総合研究がまだまだ不足している。とくにフィリピン  
のバナナ産業については社会運動の要請もあってまとまった調査研究やフェア  
トレードの実践が継続されているが、その反面で、『アジアと日本人』で  
描かれた世界や問題意識と、中米諸国やエクアドルなどの現状とをつなげて  
理解しようとする試みは少ない。変化を見据えつつ構造を捉えるためにも、  
労働生産から企業行動までの多面にわたり、「バナナと現代世界」といった  
グローバルかつミクロな視点や、地域研究が求める複合的なアプローチが必要  
とされるであろう。

3. 近年における国際市況の急激な変化、とくに経済圏の間や二国間の農業部門に関わる協定や競争が、バナナ産業にどう影響し、それが産業のあり方にどのように跳ね返ってくるのか。冒頭で指摘したように、ラテンアメリカ産バナナの輸入に対して EU が関税化に踏み切った事態は、検討すべき新しい動向の代表例であろう。

これまで見てきたいくつかの課題を踏まえ、今後は、新一次産品輸出経済論という視角と切り結ぶような事象と理論の検討を行っていきたい。

## 参考文献

- 新木秀和 [1997]「エクアドルのバナナ産業と企業グループ」(星野妙子編『ラテンアメリカの企業と産業発展』アジア経済研究所、研究双書 468)
- 新木秀和 [2004]「書評 Steve Striffler 著 In the Shadows of the State and Capital: the United Fruit Company, Popular Struggle, and Agrarian Restructuring in Ecuador, 1900-1995」『アジア経済』第 45 巻 7 号、2004 年 7 月
- 池住義憲・中村洋子・杉本皓子 [1988]『バナナから人権へ - フィリピンバナナをめぐる市民運動』同文館
- 出雲公三 [2001]『バナナとエビと私たち』岩波ブックレット、岩波書店
- 清水達也 [2002]「構造改革で競争力強化を図るエクアドル農業」(『ラテンアメリカ・レポート』Vol.19 No.2、11 月)
- 田邊正裕 [2006]「バナナ - 世界最大の輸出国エクアドル」(新木秀和編『エクアドルを知るための 60 章』明石書店、近刊)
- 鶴見良行 [1982]『バナナと日本人』岩波新書
- 鶴見良行 [1988]『バナナ』(「鶴見良行著作集」第 6 巻、みすず書房)
- 豊田隆 [2001]『アグリビジネスの国際展開 - 農産物貿易と多国籍企業 - 』農山漁村文化協会



- 中村武久 [1991] 『バナナ学入門』丸善ライブラリー、丸善株式会社
- 中村洋子 [2005] 『フィリピンバナナのその後 - 多国籍企業の操業現場と多国籍企業の規制』七つ森書館
- 若槻泰雄 [1976] 『バナナの経済学』玉川大学出版部
- 「特集 バナナから見える世界」『at』1号、2005年9月、株式会社オルター・トレード・ジャパン編集、太田出版発行。
- Bourgois, Philippe [1989] *Ethnicity at Work: Divided Labor on a Central American Banana Plantation*. Baltimore: Johns Hopkins University Press.
- Bucheli, Marcelo [2005] *Bananas and Business: The United Fruit Company in Colombia, 1899-2000*. New York and London: New York University Press.
- Josling, Timothy Edward, and T. Geoffrey Taylor eds. [2003] *Banana Wars: The Anatomy of a Trade Dispute*. Cambridge: CABI.
- Larrea, Carlos ed. [1987] *El banano en el Ecuador: transformación, modernización y subdesarrollo*. Quito: FLACSO, Corporación Editora Nacional.
- Riofrío Saenz, José [1995] *Banano en cifras y otras novedades 1995*, Guayaquil: Acción Gráfica.
- Striffler, Steve [2000] “Clase, género e identidad: la United Fruit Company, “Hacienda Tenguel”, y la reestructuración de la industria del banano” *Ecuador Debate*. 51 (diciembre), pp.155-178.
- Striffler, Steve [2002] *In the Shadows of the State and Capital: the United Fruit Company, Popular Struggle, and Agrarian Restructuring in Ecuador, 1900-1995*. Durham and London: Duke University Press.
- Striffler, Steve and Mark Moberg eds. [2003] *Banana Wars: Power, Production and History in the Americas*. Durham and London: Duke

University Press.

Vásquez, Lola y Napoleón Saltos [2004] *Ecuador: su realidad 2004-2005*, edición actualizada. Quito: Fundación “ José Peralta ” .

“ 500 mayores empresas del Ecuador ” , *Vistazo*, No.916, 13 de octubre de 2005.

### < ウェブサイト >

「 バナナ大学 」 ( 日本バナナ輸入組合ホームページ )

( <http://www.banana.co.jp> )

パシフィックフルーツ社 ホームページ ( <http://www.pacificfruit.jp/> )

「 農業情報サービス・プロジェクト 」 ホームページ

( <http://www.sica.gov.ec/>、英語またはスペイン語 )

**FAO Statistical Database** ( <http://Faostat.fao.org/faostat> )